

## わが国における母親の育児行動に関する研究動向

寺 蘭 さおり 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座  
浜 崎 隆 司 鳴門教育大学大学院学校教育研究科

キーワード: 母親、育児行動、育児期

### 1. はじめに

近年、我が国における女性の育児や仕事に対する意識は多様化してきている。医学の進歩により、日本人の生命誕生に関する認識は、子どもは〈授かりもの〉と考えられていた時代から、生殖技術を用いた妊娠の成立が〈つくる〉ものとなり、生殖技術を用いずに意志と計画に基づく妊娠の成立が〈授かる〉と表現され、語られる現象が起こり始めた(中山 1992)。子どもを〈授かる〉意味が時代の推移により変動していることが指摘され(中山 1992)、女性が子どもを産む理由も「妊娠・出産を経験したい」、「2人だけの生活は十分楽しんだから」など子どもは社会や家など他のためではなく自分自身のため、そして自分たち夫婦の状況重視の特徴が見られるようになったことが指摘されている(柏木・永久 1994)。そして、現代の未婚者・夫婦共に子どもを持つ理由に関する調査でも、「生活が楽しく豊かになるから」という回答の選択率が最も高いと報告されている(国立社会保障・人口問題研究所 2015)。仕事については、夫婦のうち、男性雇用者と無業の妻から成る世帯が主流であった時代から、1997 年以降に共働き世帯が上回って以来、共働き世帯は増加の一途をたどっている(内閣府 2019)。女性が職業を持つことに対する意識について、1992 年の調査以降、男女ともに「子どもが大きくなったら再び職業をもつ方がよい」の割合が減少する一方で、「子どもができて、ずっと職業を続ける方がよい」の割合が増加している(内閣府 2019)。現代の 30~40 代の多くの女性は、社会人としてどう活躍していくのか、女性として妊娠、出産にどう向き合い、仕事と子育てをどう両立するかについて直面すると指摘されている(土井 2019)。岡本(2002)によると、女性の人生においては、青年期のアイデンティティ形成後も個としての達成のみならず、関係性、ケア役割にも深く、主体的な関与を求められることが、女性のアイデンティティ再体制化の幅を広くし、深いものにしていくことも指摘されている。

以上のことから、現代の女性は自己の well-being を求めて、社会での役割を担いながら、自己の発達の中で、育児を開始しているということが考えられる。そこで、現代の育児期の女性にとって子どもとかわること(育児行動)の意味について我が国の先行研究を概観し、課題を述べる。

### 2. 現代の育児期の女性にとって子どもとかわること

20 世紀後半になり、親子関係研究は、「親の働きかけによって変化していく子ども」だけではなく、「子どもからの働きかけによって変化していく親」という面にも注意が注がれるようになったことが指摘されている(戸田 2009)。当時、育児不安や幼児虐待などが注目され、一般の母親の子どもへの態度も変化しつつある中で、柏木(1979)は母親の「子どもを持って成長できた」という感覚は、学歴・年齢・夫の有無を問わず、母親が共通して強く肯定している思いであることを明らかにしている。また、柏木ら(1994)は「親

となる」ことにより柔軟性、自己制御、運命・信仰・伝統の受容、視野の広がり、生き甲斐、自己の強さといった人格発達の側面を明らかにし、親が子育てに主体的にかかわることにより、人格発達を促進する可能性を指摘した。これらの指摘以来、成人期にある人間がどのように親となっていくのかについての検討が多々行われるようになった（戸田 2009）。

このように親になることによる発達について研究が行われる中で、目良（2001）は柏木ら（1994）の「親の発達」尺度をもとに項目を一部追加して、幼稚園児をもつ親と中学生をもつ親の人格発達を比較している。その結果、父親では差は確認されなかったが、母親では幼児園児をもつ母親より中学生をもつ母親の方が柔軟性の側面の得点は高く、無職の母親より有職の母親の方が自己抑制、生き甲斐感・存在感、自己の強さや柔軟性の側面の得点は高かった。このことから、特に現代の女性にとって子どもを育てることは、自己の発達を再構築する機会であり、日々繰り返される育児経験は母親の人格発達を促進するものであると考えられる。

では、どのような育児の経験の質が母親の人格発達を促進するのだろうか。原口ら（2005）によると、女性の理想とする「家庭人としての自己」「社会人および職業人としての自己」「個人としての自己」の構成割合はそれぞれ3等分されることであり、特に母親が「家庭人としての自分」と「個人としての自分」の現実と理想のギャップを感じると、育児不安を喚起されやすいという傾向が明らかにされている。また、村上・飯野・塚原・辻野（2005）によると、専業主婦は「アイデンティティ喪失に対する脅威」による育児ストレスも高いことも報告されている。以上より、多様な生き方を望む現代女性にとって育児はアイデンティティの再体制化の幅を拡げるが、それぞれの役割のバランスを崩した際に育児不安を生じることが考えられる。

豊田・岡本（2006）は育児期の女性を「母親としての自己（以下、母親）」と「個人としての自己（以下、個人）」の様態を未熟群（母親低群・個人低群）、母親中心群（母親高群・個人低群）、個人中心群（母親低群・個人高群）、統合群（母親高群・個人高群）に分類し、育児困難との関連を検討している。その結果、未熟群の母親は統合群の母親に比べて育児の困難さが顕著であり、母親中心群は母親としての役割にコミットしている一方で、子育てによる閉塞感から自分らしさを発揮できていないことが示唆されている。また、個人中心群は「母親としての自己」が自分の中で確立されておらず、母親としての充実感を実感できていないことが示唆されている。このことから育児期の女性の「母親としての自分」と「個としての自分」のバランスを図ることが、育児期の女性の育児不安の軽減に繋がることが考えられる。

小林（2006）は産後1カ月の初産婦を対象に、半構造化面接により母親が「できる」と思える子育て体験の意味を検討している。その結果、「できる」と思える子育て体験のある母親は、子どもとの愛着形成があり、母親役割、母親としての自己同一性が獲得されている状態であった。一方、「できる」と思える体験のない母親は、子どもから拒否されている、そしてできない自分を自己否定している状態であったことから、育児不安の背景には日々の育児で経験されるポジティブな自己評価が関連していることが考えられる。

寺藺（2010）は幼児をもつ両親を対象に親役割達成感と心理的な発達との関連を検討している。その結果、父母間の親役割達成感の平均値に差は確認されなかったが、親役割達成感と心理的な発達との関連には違いが確認された（図1）。具体的には、両親共に親役割達成感の高さが心理的な発達のうち、「人格的成長」「人生における目的」「環境制御力」「積極的な他者関係」の側面と関連していることが確認され、子育ての体験は個人の発達にとって重要な役割をもつ可能性が示唆されている。一方、母親のみ心理的発達の「自己受容」の側面が親役割達成感の高さと関連していることが明らかにされていることから、育児期の女性の場合、自己受容を高めるためにも母親としての満足感を味わうことが必要であり、このようなポジティブな評価が「母親としての自分」と「個としての自分」のバランスの保持に影響することが考えられる。

父親	母親
「人格的成長」	「人格的成長」
(自分が成長していると感じていること)	
「人生における目的」	「人生における目的」
(人生に目標や目的があること)	
「環境制御力」	「環境制御力」
(配偶者や友だち、職場の同僚など難しい人間関係を上手くコントロールできること)	
「積極的な他者関係」	「積極的な他者関係」
(温かく、満足のいく人間関係を築くこと)	
	「自己受容」
(自分のよい面、悪い面を受け入れていること)	

図1 親役割達成感と関連していた心理的な発達の側面（寺藺，2010 をもとに作成）

乳幼児期の子どもをもつ母親の「母親としての満足」は子どもに対する母親の感情や行動（「積極的相互作用」「被虐待傾向」「性格受容」）（繁多・菅野・白坂・真栄城 2001）や母親役割行動（「受容・共感的な関わり」「身辺自立への促し」「公共・食事のマナーへの注意」「子どもの人間関係への側面援助」）の高さ（金 2007）と関連し、思春期の子どもの精神的健康の高さは母親の家庭役割受容と関連していることが明らかにされている（山本・佐藤・塩飽 2008）。これらの知見からも母親としてのポジティブな評価は子どものニーズに応じた育児や子ども自身の精神的健康へ影響することが考えられる。

以上を踏まえると、多様な生き方を望む育児期女性が「個人として生きたい」という願いをもつ中でも育児の経験の質として、母親として「できる」という感覚を味わうことが重要であり、母親としての充実感や満足感を得るというポジティブな自己評価が育児行動や母子の精神的健康をポジティブな状態へ導くことが考えられる。

しかし、氏家（1995）によると、母親は肯定・否定の両側面の感情を併せもち、母親としてのはじめの経験は報酬的ではなく、一般的には多くの失敗が経験され、母としての技能の習熟化にとっては危機的状況になると指摘されている。氏家・高濱（1994）は3人の母親の子ども誕生後の苦悩とその解消プロセスから、成人期の発達プロセスを示唆している。母親としての最初の課題は、自分自身や子どもに対するネガティブな感情をうまくコントロールし、子どもの状態や要求にフィットした行動が取れるようになることである。そして、それは母親の思いだけで決まるものではなく、いろいろな個性や特徴をもつ子どもという現実親行動の原型を適応させていくことであり、熟達化のプロセスでもあると指摘されている。

それでは、母親はどのように親行動の原型を適応させていくのであろうか。菅野（2001）は育児期の母親が子どもに対してもつ否定的感情について、子どもの成長や母親としての適応について検討している。その結果、思い通りにならない我が子や無理な要求をする我が子に直面し、また母子関係の発達の変化から生じる行動に対して不快感情を抱くことを明らかにしている。このような不快感情は母子のズレによって引き起こされると考えられているが、その不快感情を契機に母親は子どもの育ちを展望したり、自らの育児のやり方を振り返ったりしていることが示唆されている（菅野 2001）。

坂上（2002）は歩行開始期における母子の葛藤的やりとりに着目し、母子の発達の変化を検討している。その結果、母子の関係性の再編には子どもの情動の分化と知的な理解、母親の対応の変化という三者の足並みが揃うことによって可能となることを明らかにしている。そして、母子の葛藤は子どもの自律性にとって重要なだけでなく、母親にとっても子どもの変化に応じて母親自身のかかわりを変えていくことで、対等な相手として子どもに接する姿勢を身につけていくという発達の意義を示唆している（坂上 2002）。

徳田（2004）は女性にとっての子育ての意味づけは、母親となった女性が日々の具体的な生活、相互作用の中で子どもとかかわり合い、未来に向かって生成する意味づけのプロセスがあることを明らかにしている。その中には、育児に伴う心理的な負担を成長課題として自己へ受け入れていく方略としての意味づけがあり、この「自己への受け入れ方略」は一種の適応プロセスであることを指摘している（徳田 2004）。

以上の知見を踏まえると、現代の育児期の女性が母親として体験する育児行動とは、子どもとの関係性においてポジティブな体験を味わう一方でネガティブな体験を対処しながら日常的に繰り返される子どもの世話といえる。そして母親は、子どもの誕生前から育児行動の枠組みがあり、子どもとかかわりにおいてうまくいかないことを経験しながらも、その都度、我が子の個性や育ちを受け入れ、母親自身の子ども観や育児観を変容させ、育児行動の枠組みを調節していくことが考えられる。このことから母親は日々の育児の中で我が子の特性に応じた育児行動の枠組みを更新しながら、母親としての自分へ適応していくことが示唆されるであろう。

武田・小林・加藤（2012b）は乳幼児の子どもをもつ母親の養育者としての発達過程を明らかにしている。武田・小林・加藤（2012a）は Bowlby（1969, 1982；黒田・大羽・岡田・黒田監訳 2003）の「愛着－養育プログラム」に焦点を当て、母親が養育者として発達していくことを「養育システム」の発達と捉えている。これは子どもの不安・脅威等から生ずる愛着行動を起こす愛着システムに対して、養育者である母親が適切な養育により安心を与える（養育システム）ものである（武田ら 2012a）。そして、母親の養育システムを適切に機能させることが、子どもの愛着システムに適切に対応できることに繋がり、結果的に母子の二者関係「愛着－養育プログラム」が適切になされると仮定されている（武田ら 2012a）。数井・遠藤（2005）が示唆する親の養育システムは愛着システムの成熟した変容であるという考えに基づき、武田ら（2012a）は母親の養育システムは子どもへの「愛着」「養育」のバランスを変化させながら発達していくことを指摘している。母親から子どもへの愛着（愛着的因子）とは、母親としての自己意識が形成される途中において、母親は自分自身への関心が強く、母親という存在に対して不安を感じ、支えを必要とし、母親としての不安を子どもの反応を通して軽減しようとする、そして、母親から子どもへの養育（養育的因子）とは、子どもに関心を示し、子どもの持つ不安や驚異に対して保護し、安心や慰めを与え子どもの不安や脅威を軽減させ、欲求を満たしてあげること、母親としての自分を受容すること、と定義されている（武田ら 2012a；武田ら 2012b）。武田・小林・弓削（2016）は養育システムが発達するということは愛着的因子が養育的因子より低いと言うことを示唆している。実際、愛着的因子は低く、養育的因子は高いという 2 相性の分布を示し、子育て経験を積むことで愛着的因子の一部は下降、養育的因子の一部は上昇することが明らかにされている（武田ら 2012b）。また、医療者が気になる母親の愛着的因子はそれ以外の母親より高く、養育的因子は低いことが明らかにされている（武田 2014）。これらの知見から、母親は子どもへの育児行動を通して子どものニーズを満たしながら養育力を高め、母親としての自信を得ていることが考えられる。実際、母親としてのアイデンティティの未熟であることが母親の育児不安や子どもの QOL（Quality of Life）に影響し（浅見・柴田 2013）、母親としてのアイデンティティの形成には、母親自身が育児に対して効力感を抱くことの重要性が示唆されている（山口 2010）。

母親の育児への適応する能力の一つに育児に対する自己効力感がある（金岡 2011）。育児に対する自己効力感とは、育児で直面する経験的なあるいは未経験な新しい状況に遭遇した際に臨機応変に対処できるという確信の程度であり、育児負担感の低減にも影響するという。

これらの知見からも日々の育児経験において子どものニーズを満たしながら成功体験を積み重ねていくことにより、母親としての自分へ適応し、育児期女性のアイデンティティは再構築されるが、母親が我が子

の育児に対して「できる」という確信をもてない場合、育児不安や子どものQOLをも低下する可能性も示唆されるであろう。したがって、育児期女性にとって子どものニーズに応じた育児行動は、「母親」としての発達、「個」としての発達、さらには間接的に子どものQOLに重要な意味をもつことが考えられる。

### 3. 母親の子どもへのかかわりの規定要因

Belsky (1984) の親のプロセスモデルでは、親としての行動の規定要因として、養育者の資質（人格面、心理面、子育てに対する態度など）、子どもの特徴（気質、年齢、性別）、サポートに関する社会的文脈（夫婦関係、職業経験、社会的ネットワークなど）が考えられている。そこで、Belsky (1984) の親のプロセスモデルを参考に、我が国の母親の子どもへのかかわりを規定する要因として、「母親の個人的な心理的資源」「子どもの特性」「母親への育児支援」に関する研究を概観し、課題を述べる。

「母親の個人的な心理的資源」について、「親をわざと困らせる」といった子どもに対する母親の被害的認知は、直接不適切な養育を高めたり、子どもの泣きや反抗といった母親の要求に従わない行動に対する怒りや嫌悪が強いほど、母親の不適切な養育行動が高まったりすることが示唆されている（中谷 2016）。様々なリスクにより引き起こされた育児不安（育児ストレス）が、育児行動に望ましくない影響を与えると考えられている（渡邊 2011）。例えば、子どもに対するストレスは母親の不適切な養育行動と関連していることが明らかにされている（浦山・金川・大木 2009）。また、「子どもを怒鳴りだすと止まらなくなる」や「子どもが言ってわからなければ叩いたりする」という項目を含む否定的養育行動は、母親の育児不安と関連することが明らかにされている（園田 2019）。さらに、乳幼児の子どもをもつ母親の子育てに対する不安感や負担感は、感情にまかせて子どもを叱ったり、子どもが言うことをきかないと、大声でどなりつけたりする養育行動との関連が明らかにされている（中山・渡邊・春高・木山 2014）。これらの知見からも、母親の個人的な心理的資源として、ネガティブな認知や育児不安への対処能力の低さは不適切な育児行動を引き起こすことが考えられる。

一方、母親の育児不安が低いと、子どもへの共感的な行動が促進することも予測されている（園田 2019）。また、子育てにおける充実感は、子どもに積極的に関与したり、肯定的なかかわりに繋がったりすることが明らかにされている（中山ら 2014）。さらに、乳幼児期の子どもをもつ母親の「母親としての満足」は不適切な養育行動の低減（繁多ら 2001）や母親役割行動（「受容・共感的な関わり」「身辺自立への促し」「公共・食事のマナーへの注意」「子どもの人間関係への側面援助」）の高さ（金 2007）と関連している。そして「子どもに接していることが楽しいから」といった育児に対する内発的な動機づけをもつ母親は子どもとかわかる時間が長いことも明らかにされている（小林・中島・松本・橘・松岡・杉本・速水 2018）。また、母親の親役割の肯定的意識が母親自身の親育ちにつながり、バランスのよい養育態度で育児ができることも明らかにされている（楠本 2019）。このように、母親の個人的な心理的資源として、育児不安への高い対処能力、育児に対するポジティブな自己評価や内発的動機づけは母親の子どもへのかかわりを柔軟にし、育児期女性の「母親としての発達」を促進することが考えられる。

「子どもの特性」について、森下・森下 (2006) は3歳児をもつ母親を対象に、子どもの気質と母親の養育態度について検討している。その結果、男児より女児の方が母親に影響を多く及ぼし、母親にとって育てにくい気質の子どもである場合、特に統制的な養育態度に影響されていることが明らかとなっている。また、子育てにおいては、母親から子どもが影響を受けることより、子どもから母親が影響を受けることの方が強いと指摘している。

また、母親が子どもに自分の意向を押し付ける強制的なかわりをしてしまうことや一貫性のないかわりをするのは、子どもの扱いの難しさによって喚起されたり（西野 2005）、子どもの気質の育てにくさは、母親の育児ストレスや否定的な養育態度に影響したり（園田 2012）していることが明らかにされている。森下ら（2006）も育児は母子との相互作用の中で進行し、母親が子どもに影響するように、母親自身も子どもから影響されると指摘している。このように、「子どもの特性」は母親の育児不安や子どもへの不適切なかわりを及ぼすことが考えられる。しかし、前述した母親の個人的な心理的資源としての育児不安への高い対処能力、育児に対するポジティブな自己評価や内発的動機づけをもつことができれば、母親が抱く「子どもの育てにくさ」は軽減されるのではないだろうか。

「母親への育児支援」について、森下・木村（2004）によると、男児の母親について、たとえ自分の母から拒否的に育てられても、自分の父や夫からの情緒的サポートが豊かであれば、男児に対して母親は受容的態度を形成する可能性が示唆されている。一方、女児の母親について、自分が拒否的に育てられた場合、自分の父や母、夫からのサポートではなく、友人からの情緒的なサポートが受容的態度の形成に影響していることが明らかにされている。このことは、母親の個人的な資源としての生育歴に課題があったとしても母親への育児支援次第では、子どもへの不適切なかわりを予防できることも考えられる。

一般的に、人がストレスを生じた際、女性は男性よりも「情緒的援助希求」の使用が多いと指摘されている（島津 2005）。実際に「子どもへの対応で困っていることを周囲の人にきいてもらう」や「周囲の人に子どもへの対応を協力してもらうよう頼む」といった項目を含む「サポート希求」の得点は父親よりも母親の方が高いことが明らかにされている（寺藺 2009）。また、母親において「サポート希求」の使用が高いほど、親役割達成感の得点が高いことが明らかにされている（寺藺 2009）。さらに、小坂（2004）においても同様に、情緒的なサポートが高いほど、親としての態度や子どもとの関係性に対する満足感を高める方向に作用することが示唆されている。一方、育児仲間との交流のなさが、抑うつを経由して、心理的虐待や身体的虐待に間接的に影響を及ぼしていることも明らかにされている（武内・辰馬・藤田 2014）。これらの知見からも特に母親への育児支援が必要であり、母親への育児支援は母親自身のポジティブな自己評価や子どもへのかかわりに対しても影響があると言える。

渡辺・石井（2009）によると、ソーシャル・サポートは直接育児ストレスの軽減に作用するのではなく、ソーシャル・サポートは自己効力感の「行動の積極性」を高め、育児ストレスの軽減効果に繋がることが示唆されている。金岡（2011）も母親が情緒的支援を感じていても育児に対する自己効力感が高くなければ、育児負担感は軽減しないことを示唆している。寺本・廣瀬・斎藤・三国・岡光・園部・白川・田中・大森・澤田・橋本・小林（2006）による実際の親子相互作用に関する育児支援プログラムにおいても、母親の良い点についてフィードバックを返すことにより、育児ストレスが低減したり、子どもの言語面を中心とする発達が促進されたりすることが確認されている。これらの知見は、母親が「できる」と自覚するような育児支援が母親の育児不安を軽減することを示唆しており、母親への育児支援については今後、社会的文脈において母親の育児に対する自己効力感を向上するような育児支援が必要であろう。

#### 4. まとめと今後の課題

本稿では現代の育児期の女性にとって子どもとかわること（育児行動）の意味について我が国の先行研究を概観した。その結果、育児期女性にとって子どものニーズに応じた育児行動は、「母親」としての発達、「個」としての発達、さらには間接的に子どものQOLに重要な意味をもつことが考えられた。しかし、先

行研究において、どのような子どもへのかかわりが、母親としての発達や子どものニーズに応じた育児行動であるかどうかについては検討されていない。母親の子どもへのかかわりとして、現代の育児期女性の母親の養育者としての発達や子どものQOLを促進する子どもへのかかわり、すなわち育児行動の項目を検討することが必要であろう。

次に、本稿ではBelsky (1984) の親のプロセスモデルを参考に、我が国の母親の子どもへのかかわりを規定する要因として、「母親の個人的な心理的資源」「子どもの特性」「母親への育児支援」に関する研究を概観した。その結果、母親の子どもへのかかわりと「子どもの特性」は影響し合うが、「母親の個人的な心理的資源」にアプローチした「母親への育児支援」が母親の子どもへのかかわりを柔軟にし、育児期女性の「母親としての発達」を促進することが考えられた。また、「母親の個人的な心理的資源」として、育児不安への対処能力としての育児に対する自己効力感、母親としての満足感や充足感などのポジティブな自己評価は「母親への育児支援」へのアプローチとして数多く検討されていた。しかし、子どもへのかかわりという行動そのものへの動機づけと「母親への育児支援」については検討されていなかった。本稿では日々の育児経験における成功体験を積み重ねていくことにより、育児期女性の「母親」としての発達が促進されることが示唆された。また、育児における動機づけと育児の質は関連し（小林ら 2018）、子育ての動機も学習することが指摘されている（青柳 2009）ことを踏まえると、子どものニーズに応じたかかわりを「できる」と実感するような育児支援方法の開発には、「母親の個人的な心理的資源」として育児に対する動機づけを検討することも必要であろう。

付記：本研究の一部は科学研究費助成事業(基盤研究(C)) (課題番号:17K01889) の助成を受けた。また、本研究は、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科に提出した博士論文の一部に加筆修正したものである。

#### 引用文献

- 青柳 肇 (2009) . 動機づけ理論と子育て支援. 繁多 進編. 子育て支援に生きる心理学—実践のための基礎知識 (pp109-120) 初版 新曜社
- 浅見侑子, 柴田玲子 (2013) . 子どものQOLに関連する母親のアイデンティティ: 「個」と「関係性」の2側面からの検討. 子どもの健康科学, 13, 9-16.
- Belsky, J. (1984) . The determinants of parenting : A process model . *Child Development*, 55, 83-96.
- Bowlby J. (1969, 1982) . *Attachment and loss, Vol.1 Attachment*. The Tavistock Institute of Human Relations. (黒田実郎・大羽 泰・岡田洋子・黒田聖一(監訳) (2003) . 母子関係の理論I: 愛着行動(新版) 岩崎学術出版社)
- 土井麻里 (2019) . 女性心身医学における「身」の医療の重要性—こころと体といのちの統合へ向けて— . 女性心身医学, 23, 186-192.
- 繁多 進・菅野幸恵・白坂香弥・真栄城和美 (2001) . 乳幼児に対する母親の感情と行動. 母子研究, 21, 28-36.
- 原口由紀子・松浦治代・矢倉紀子・佐々木くみ子・笠置綱清 (2005) . 母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連. 小児保健研究, 64, 265-271.

- 金岡 緑 (2011) .育児に対する自己効力感尺度 (parenting Self-efficacy Scale : PSE尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究, 70, 27-38.
- 柏木恵子 (1979) . 母親の母性意識について: 一般の母親と母子寮の母親との比較を通して. 母子研究, 2, 22-33.
- 柏木恵子・若松素子 (1994) . 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 数井みゆき・遠藤利彦 (2005) . アタッチメント: 生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房
- 金 娟鏡 (2007) . 母親役割行動と母親役割満足感: 幼児をもつ母親を対象にした日韓比較. 学校教育学研究論集, 15, 1-14.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2015) . 「第15回出生動向基本調査」 (結婚と出産に関する全国調査) [www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15\\_gaiyo.asp](http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp) (参照2020-04-02)
- 小林佐知子・中島奈保子・松本麻友子・橘 春菜・松岡弥玲・杉本英晴・速水敏彦 (2018) . 乳幼児をもつ母親の育児に対する動機づけと育児行動. 静岡県立大学短期大学部, 32-W, 1-7.
- 小林康江 (2006) . 産後1ヵ月の母親が「できる」と思える子育ての体験. 母性衛生, 47, 117-124.
- 小坂千秋 (2004) . 幼児を持つ母親の親役割満足感を規定する要因: 就労形態からの検討. 発達研究, 18, 73-87.
- 楠本洋子 (2019) . 母親の「親育ち」が養育態度に及ぼす影響. 保育学研究, 57, 114-125.
- 目良秋子 (2001) . 父親と母親の子育てによる人格発達. 発達研究, 16, 87-98.
- 文部科学省 (2017) . 家庭教育支援の具体的な推進方策について.  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2017/04/03/1383700\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/04/03/1383700_01.pdf) (2020-08-05参照) .
- 文部科学省.幼稚園教育要領解説 (2018) .  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/25/1384661\\_3\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/25/1384661_3_3.pdf) (2020-02-08参照)
- 森下正康・木村あゆみ (2004) . 母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートの影響. 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 14, 123-131.
- 森下順子・森下正康 (2006) . 幼児の気質が母親の行動特徴と養育態度に及ぼす影響. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, 56, 43-50.
- 村上京子・飯野英親・塚原正人・辻野久美子 (2005) . 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析. 小児保健研究, 64, 425-431.
- 内閣府 (2019) : 男女共同参画白書令和元年度版.  
[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/r01/zentai/index.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r01/zentai/index.html) (参照2020-04-19)
- 中谷奈美子 (2016) . 子どもの行動に対する母親の帰属と不適切な養育: 感情を媒介として. 心理学研究, 87, 40-49.
- 中山まき子 (1992) . 妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識: 子どもを〈授かる〉〈つくる〉意識を中心に. 発達心理学研究, 3, 51-64.



- 中山智哉・渡邊 望・春高裕美・木山徹哉（2014）．母親の育児感情に影響を及ぼす要因の探索的検討：母親の育児方法・育児への省察および保育相談支援との関連．九州女子大学紀要，50，15-29．
- 西野美佐子（2005）．母親の教育的かかわりと幼児の気質的特徴との関連に関する研究．保育学研究，43，233-242．
- 岡本祐子（2002）．成人女性のアイデンティティの危機と発達．岡本祐子編．アイデンティティ生涯発達論の射程．第1版（pp79－120）ミネルヴァ書房
- 坂上祐子（2002）．歩行開始期における母子の葛藤的やりとりの発達的变化：母子における共変化過程の検討．発達心理学研究，13，261-273．
- Schön , Donald.A. （1983）. *The Reflective Practitioner*. Basic Book. （佐藤学・秋田喜代美（監訳）（2001）．専門家の智恵 反省的实践家は行為しながら考える ゆみる出版）
- 島津明人（2005）．ストレスコーピングと性差（特集ストレスに性差はあるのか）．性差と医療，2，1289-1293．
- 園田菜摘（2012）．母親の育児不安に関する研究：サポート・子どもの気質・養育行動との関連．横浜国立大学教育人間科学部紀要I 教育科学，14，41-47．
- 園田菜摘（2019）．母親の肯定的・否定的養育行動を規定する要因の検討．横浜国立大学教育学部紀要I，教育科学，2，115－126．
- 菅野幸恵（2001）．母親が子どもをイヤになること：育児における不快感情とそれに対する説明づけ．発達心理学研究，12，12-23．
- 武田江里子・小林康江・加藤千晶（2012a）．母親の子どもに対する「愛着－養育バランス」尺度の開発第1報－母親から子どもへの「愛着」「養育」の構成因子の抽出－．日本看護科学会誌，32（1），30-39．
- 武田江里子・小林康江・加藤千晶（2012b）．母親の子どもに対する「愛着－養育バランス」尺度の開発第2報－尺度としての信頼性と妥当性－．日本看護科学会誌，32（4），22-31．
- 武田江里子（2014）．「愛着－養育バランス」尺度短縮版の作成と信頼性・妥当性の検討－乳幼児検診での〈気になる〉母親との関連から－．小児保健研究，73，783-789．
- 武田江里子・小林康江・弓削美鈴（2016）．乳幼児を子育て中の母親から子どもへの「愛着－養育バランス」に影響する内的要因－母親の被養育体験と内的作業モデルの影響－．日本看護科学会誌，36，71-79．
- 武内珠美・辰馬麻未・藤田 敦（2014）．虐待相当行為を含む母親の養育態度に関する研究：抑うつと育児ソーシャル・サポートに焦点をあてて．大分大学教育福祉科学部研究紀要，36，105-116．
- 寺本妙子・廣瀬たい子・斉藤早香枝・三国久美・岡光基子・園部真美・白川園子・田中克枝・大森貴秀・澤田和美・橋本重子・小林秀子（2006）．NCASTに基づく育児支援プログラムの評価：母親の育児ストレスと子どもの発達からの検討．小児保健研究，65，439-447．
- 寺蘭さおり（2009）．ストレスコーピングと親役割達成感との関係：子どもの自己主張に対する親のストレスに着目して．小児保健研究，68，359-365．

- 寺菌さおり（2010）．子育てによる親役割達成感と親の心理的な発達との関連性．小児保健研究, 69, 47-52.
- 戸田まり（2009）．展望 親子関係研究の視座．教育心理学研究, 48, 173-181.
- 数井みゆき・遠藤利彦（2005）．アタッチメント：生涯にわたる絆 初版 ミネルヴァ書房
- 徳田治子（2004）．ナラティブから捉える子育て期女性の意味づけ：生涯発達の視点から．発達心理学研究, 15, 13-26.
- 豊田史代・岡本祐子（2006）．育児期の女性における「母親としての自己」「個人としての自己」の葛藤と統合：育児困難との関連：広島大学心理学研究, 5, 201-222.
- 氏家達夫・高濱祐子（1994）．3人の母親：その適応過程についての追跡的研究．発達心理学研究, 5, 123-136.
- 氏家達夫（1995）．乳幼児と親の発達．麻生 武・内田伸子編．講座 生涯発達心理学 第2巻 人生への旅立ち：胎児・乳児・幼児前期（pp99-128）初版 金子書房
- 浦山晶子・金川克子・大木秀一（2009）．母親の身近な人間関係におけるストレス感と不適切な養育行動の関連性について．石川看護雑誌, 6, 11-17.
- 渡邊茉奈美（2011）．「育児不安」の再検討：子ども虐待予防への示唆．東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 191-202.
- 渡辺弥生・石井睦子（2009）．乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について．法政大学文学部紀要, 60, 133-145.
- 山口雅史（2010）．母親になるということ：母親アイデンティティを巡る考察 あいり出版
- 山口豊一・松崎くみ子・柴田玲子・根本芳子・磯川かなえ・佐々木円・鈴木和実（2013）．就学前の「気になる子ども」支援のための包括的スクリーニング尺度作成の試みー日本におけるKiddy-KINDL<sup>R</sup> Questionnaire「幼児版QOL尺度親用」を用いてー．跡見学園女子大学文学部紀要, 48, 173-183.
- 山本三奈・佐藤幸子・塩飽 仁（2008）．両親の役割受容，親役割行動と思春期にある子どもの精神的健康との関連．小児保健研究, 67, 349-356.

(2022年3月31日提出)

(2022年5月7日受理)

# **Trends in Studies on Childcare Behavior among Mothers in Japan**

**TERAZONO, Saori**

Faculty of Education, Saitama University

**HAMAZAKI, Takashi**

Naruto University of Education

## **Abstract**

This paper reviews the existing research in Japan to explore how modern women construe involvement with a child (i.e., childcare behavior) during the child-rearing stage. Results of the review revealed that childcare behaviors responsive to the needs of the child were extremely significant for women in their child-rearing years in relation to their maternal and individual development and, indirectly, the effect on their child's quality of life (QOL) .

Further, this paper references Belsky's (1984) process of the parenting model to outline the existing research on factors that define the mother-child relationship in Japan: personal psychological resources of mothers, characteristics of children, and childcare support for mothers. The outcomes indicate the mutual influence of maternal involvement with children and characteristics of children. However, support for mothers tailored to personal maternal psychological resources accords flexibility to a mother's involvement with their child and promotes the maternal development of women engaged in childcare. Furthermore, numerous studies on extending support for mothers have emphasized the approach of encouraging a positive self-evaluation, including self-efficacy as a personal psychological resource for mothers engaged in childcare. Such positive self-evaluation denotes the maternal ability to manage childcare anxiety and boosts satisfaction and fulfillment in mothers. Future investigations must examine the maternal motivation for childcare as a personal psychological resource to devise childcare support methods furthering the realization that mothers can be engaged with the needs of their children.

**Keywords** : mother , childcare , women during the child-rearing stage